小さい足、中ぐらい、大きな足。

ロスタイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さい足、中ぐらい、大きな足。

【Ｎコード】
Ｎ４９１０Ｄ

【作者名】
ロスタイム

【あらすじ】
今の心の状態を綴ってみました。お見苦しいところは、ご容赦してください。

霜柱、小さな足が、シャリシャリと踏みならす。
水たまりの氷を、小さな足が、バリバリと踏みならす。
凍てつく、耳もちぎれそうな寒い朝、吐く息は、白くても、小さな足の集団は、鍋から立ち上る湯気のような、白い息を吐きそれをすることに一心不乱になる。
傍らを足早に急ぐ、中ぐらい、大きい足は、それを、いちべつするもの、見向きもしないもの、見てほほえむもの、中ぐらい、大きい足は、自分の心を、シャリシャリと、バリバリといつも踏みならす。
霜柱、水たまりの氷を、踏みつける気持ちいい物だった。
今はできない。
今は自分の心の中のそれを、愛していた者、大きい足の、憎み、いみきらう者に、シャリシャリと、バリバリと、けちらされてしまう。
白い凍てつくような息を吐きながら、中ぐらい、大きい足は、その傍らを足早に急ぐ、私の心の中の、霜柱、冷たい氷は、誰にも、踏みつけ、ケチらされることもない。まるで、誰もいない、シベリヤのツンドラのような永久凍土だ。大きい足の、見ず知らずの者でもいい、踏みにじられてもいい、その足のわずかな温もりで、私の心の、霜柱、氷を溶かしてください。
寒さで凍てつき、ふるえながら吐く、白き息を、鏡が曇るぐらい、暖かき物にしてください。
生きることを急ぐ、大きな足の私。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4910d/

小さい足、中ぐらい、大きな足。

2011年1月18日15時17分発行